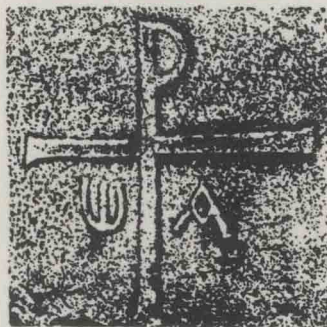


ヨハネによる福音注解

オリゲネス 小高毅訳

キリスト教古典叢書 //



上智大学神学部編
P. ネメシエギ責任編集
創文社刊

ヨハネによる福音注解

オリゲネス
小高毅訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

小高毅（おだか・たけし）

1942年生まれ。

1976年聖アントニオ神学院（哲学・神学）卒。

1978-1980年 Augustinianum, Institutum Patristicum (Roma)
に学ぶ。

1984年上智大学神学部神学博士。

〔訳書〕 オリゲネス『諸原理について』『雅歌注解・講話』『祈りについて・殉教の勧め』『ヘラクレイデスとの対話』『ローマの信徒への手紙注解』『聖霊論』（以上創文社），リュバク『カトリシズム』（エンデルレ書店）

〔著書〕 『オリゲネス』『古代キリスト教思想家の世界』（以上創文社）

ヨハネによる福音注解〔キリスト教古典叢書11〕

1984年11月20日 第1刷発行

ISBN4-423-39211-9

1993年5月30日 第2刷発行

編 集 者 上智大学神学部

編集責任者 P・ネメシエギ

訳 者 小 高 毅

発 行 者 久 保 井 浩 俊

定価 7210 円（本体 7000円）

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

序言

聖書の全体は、すべてのキリスト者にとって貴重な宝であるが、時代によって、また人によって、聖書の中のある特定の書が特に重視されることがある。古代教会のキリスト者たちは、ヨハネ福音書に、そのような優先権を認めたのである。アンブロシウスが言ったように、「ヨハネは、他の聖書記者よりも、大きなラッパをもって、神の神秘の調べを伝える」と彼らは判断したからである。古代教会が正統信仰として宣言し、キリスト教の主流が今日に至るまで承認してきたキリスト論に決定的な影響を及ぼしたのは、まさに、このヨハネ福音書である。後の時代になると、西欧のキリスト教界においては、特に宗教改革以来、パウロの思想が影響力を増したが、ヨハネの思想を優先的に扱い続けてきたのは、東方教会である。日本において、キリスト教は主に西欧的な思想をもっている宣教師たちの働きによって広まり、西欧神学、特にドイツ神学の色彩を帯びるようになったが、日本人の考え方に特に敏感である遠藤周作氏が指摘しているように、ヨハネ福音の思想に満たされた「東方キリスト教の中には、日本人に向いている部分がある」と思われる。だからこそ遠藤氏は、あえて、「私個人はヨハネ神学のほうがいいのではないかと思うようになっていきます」と断言するのである（『私にとって神とは』、光文社、一九八三年、五九ページ）。

そこで、ヨハネ福音書をあれほど高く評価した古代教会の神学者の手によるヨハネ福音書注解の翻訳を日本の読者に提供することには、確かに重大な意義がある。小高毅氏が、三年かかって完成したこの翻訳は、学問的に高いレベルを保っている正確な訳でありながら、一般読者にも読みやすい文書になっている。

オリゲネスの原作の大部分が紛失し、一部分しか保存されていないことは、もちろん、きわめて残念なことであるが、現存しているその一部分によっても、オリゲネスの解釈方法や神学的理解がよく読みとられるのである。彼の解釈方法や神学的理解は、現代の聖書学者や神学者のそれとは大いに異なっているが、きわめて興味深いものである。聖書学に精通している現代の読者は、多くの場合、オリゲネスが福音書の一つ一つの句の意味として提示している内容を、福音書の原著者が意図した意味だと承認することはできないであろうが、オリゲネスが、彼の理解に基づいて、キリスト教的な生き方として勧めていることは、なるほどと、うなずかれる意見だと感じるであろう。この不思議な現象の理由は、他の教父たちと同様、オリゲネスのキリスト教理解も、個別的にとらえられた一つ一つの聖書箇所に基づくものではなく、イエスの姿において現われたキリスト教の真髄に基づいているということである。したがって、オリゲネスのヨハネ理解には、プラトン哲学によって形作られた彼の思想体系に由来し、永久的な妥当性を有していない諸点があるにしても、彼の説明に、人間の永遠の根本問題をいつの時代の人々とともに考えざるを得ない現代人にとっても、有効な点が多く見いだされるのである。このような発見に助けられて、善なる神と一致して生きるという、すべての人間に共通の召命が一層よく果たされるであろう。オリゲネスがすべての人に熱心に勧めようとしたことは、まさに、そのようなことである。

ペトロ・ネメシエギ

目次

序言	ペテロ・ネメシエギ	i
『ヨハネによる福音注解』解説		一
内容区分		一九
『ヨハネによる福音注解』		三七
第一卷		三九
第二卷		九七
第四卷（断片）		一六一
第五卷（断片）		一六三
第六卷		一七三
第十卷		二五九
第十三卷		三一九

第十九卷	四一三
第二十卷	四五一
第二十八卷	五三五
第三十二卷	五七九
断片	六五九
引用箇所之注	七三二
本文批判	八〇九
ギリシア語翻訳凡例	八二二
文献	八四四

『ヨハネによる福音注解』解説

オリゲネスは、その生涯にわたって、実に多くの「聖書注解」を著しているが、完全な形で現存しているものは一つもない。部分的にもしくは断片的に、あるいはラテン語訳で、辛うじて、そのごく一部が現代まで伝えられているにすぎない。部分的とはいえ、ある程度まとまった形で現存している「聖書注解」は、『マタイによる福音注解』、『ヨハネによる福音注解』、『ローマ人への手紙注解』、『雅歌注解』の僅か四編にすぎない。しかも、『ローマ人への手紙注解』、『雅歌注解』はルフィヌスのラテン語訳で現存しているにすぎない。従って、ギリシア語原文で現存するオリゲネスの「聖書注解」は僅か二編にすぎないのである。しかも、『マタイによる福音注解』は、名の知られていない訳者によるラテン語訳を別にして、全二五巻のうち、第十巻から第十七巻までの八巻、『ヨハネによる福音注解』は、全三二巻のうち、第一、二、六、十、十三、十九、二十、二十八、三十二巻の九巻（ただし、第六巻は結末、第十巻は冒頭の部分を欠いており不完全である）が現存しているのみである。

『マタイによる福音注解』が、二四四年以降に、カイサリアで著述されたのに対して、『ヨハネによる福音注解』は、ごく初期にアレクサンドリアで着手され、アレクサンドリアを去り、カイサリアに居を移した後にも継続されたものである。これは第三十二巻を最終巻としており、オリゲネスは『ヨハネによる福音』を最後まで注解することなく、『マタイによる福音注解』に移って行ったようである。いずれにせよ、部分的ではあるが、これらを通して、またラテン語訳を通して、オリゲネスの生涯にわたる聖書注解を垣間見ることができるのである。さて、ここに訳出するのは、オリゲネスの著述活動の初期から中期にかけての代表作とも言うべき『ヨハネに

よる福音注解』である。

ここでオリゲネスが注解している『ヨハネによる福音』は、当時、既に、四つの正典福音書の中でも一番最後に使徒ヨハネによって著されたとする考えが教会のうちに定着しており、アレクサンドリアのクレメンスはこれを「霊的福音」と呼んでいた。⁽¹⁾ この『福音』は初代教会の教父たちにとって重要な文書であり、教理の発展の上でも非常に重要な役割を果たしている。そもそも、この『福音』の注解を最初に著したのが、キリスト教的グノーシス主義者ヴァレンティノスの弟子ヘラクレオンであり、それに対処する形で、オリゲネスはこの『注解』を著している。また、アレイオス論争の間に、アレイオス側の陣営から、アステリオス、ヘラクレアのテオドロスがこの『福音』の注解を著したようである。これに対して、ディデュモス、アポリナリオス、アンモニオスがそれぞれ、ニカイア公会議で宣言された信仰を擁護する立場で、この『福音』の注解を著している。それらの『注解』は、いずれも僅かに断片が伝えられているにすぎない。

ヨアンネス・クリュゾストモスも、三九八年にアンティオキアを去る以前に、『ヨハネによる福音講話』を講じている。これは、聴衆を前にして、講話の形でなされたものであるが、その学問的な説明は、他の教父たちの『注解』と比肩しうるものである。ヨアンネスの他の『講話』と比べて、倫理的勧告よりも論争的性格が強くでており、この『福音』を通して、キリストの神性を強調すると共に、キリストのへりくだりを説き明かしている。同じアンティオキア学派に属する、モプスエスティアのテオドロスも、この『福音』の『注解』を著している。これはギリシア語では断片しか残っておらず、シリア語訳が現存している。この『注解』でも、反アレイオス主義の立場が明らかにされている。

更に、アレクサンドリアのキュリロスもこの『福音』の『注解』を著している。これはネストリオスとの問題が生ずる以前に著されたものであり、同じく反アレイオス主義の立場から著されている。実に、キュリロスは、三位一体に関する著作と共に、この『ヨハネによる福音注解』によって、「神学的研鑽と思弁的才能を兼備した

生まれながらの教理学者」と評されるのである。⁽²⁾

更にまた、アウグスティヌスも一二四編の『ヨハネによる福音講解』を著している。これは、司牧的配慮のもとに、信徒の信仰生活の向上をめざした神学的講話として講じられているが、ペラギウス派、ドナトゥス派、アレオス派に対する論述も少なからず認められる。

以上、ごく大まかに概略を述べたにすぎないが、グノーシス主義、アレオス主義、ペラギウス主義、ドナトゥス派という初代教会が直面した異端論争の中で、『ヨハネによる福音』が果たした役割がうかがえよう。また、オリゲネス、ヨアンネス・クリュゾストモス、モプスエスティアのテオドロス、アレクサンドリアのキュリロス、アウグスティヌスと、アレクサンドリア学派、アンティオキア学派、ラテン教父を代表する人物たちの『ヨハネによる福音』の釈義が、幸いにして、現在まで伝えられているのは、それぞれの聖書釈義の傾向を理解する上でも、大変興味深いことである。

さて、オリゲネスは「四つの『福音』は、教会の基本的構成要素のようなもの」と考え、この四つの『福音』は旧約と新約という聖書全体の「初穂」と考えているが、その四つの『福音』の中でも「初穂」は『ヨハネによる福音』であると考えている。⁽⁴⁾即ち、『ヨハネによる福音』こそ聖書全体の「初穂」、つまりすべての収穫の後に神にささげられる最も尊いもの、と考えているのである。実に、ヨハネこそ、他の三人の福音記者よりも、イエスに関するより偉大で、より完全な発言をしており、彼らに比べて、完璧にイエスの神性を明らかにしているのである。⁽⁶⁾ヨハネがその『福音』のうちに言理の人としての誕生を書き記していないのも、神についての一際大なる知識によるのである。⁽⁷⁾それというのも、このヨハネが「イエスの」愛された弟子であるからである。オリゲネスは言う、

「イエスが話された言葉は文字ではなく霊であり、それらすべてを通じて、死ではなく生命^{いのち}であるとすれば、⁽⁸⁾「イエスの」愛された弟子も「イエス」に倣い、霊と生命^{いのち}の言葉」を書き記したはずです」

ヨハネがイエスの胸のうちに横になっていた（ヨハネ 13・23）と記されているのも、ヨハネが「師からの愛〔を受ける〕にふさわしいと認められ、選ばれた者として、このような特権にふさわしい者とされた」ことを表徴しているのである。⁽⁹⁾

従って、このような深遠な『福音』を理解するためには、ヨハネのように、「言理によりかかり、より神秘的なことども〔のうち〕に憩う」者、もう一人のヨハネとならねばならないのである。オリゲネスは言う、

「その『ヨハネによる福音』の」精神はイエスの胸によりかかった者、母としてマリヤをイエスが与えた者でなければ理解できません。そして、もう一人のヨハネになるために、ヨハネの場合と同様に、「その人はその人」自身がイエスであるといエスから言われねばなりません」⁽¹¹⁾。

「この『福音』を正確に理解するためには、まことに、こう言い切れねばなりません。『神からいただいた恵みを知るために、わたしたちはキリストの精神を持つていて』と」⁽¹²⁾。

従って、オリゲネスの『ヨハネによる福音注解』は、あえて言えば、もう一人のヨハネとして、キリストの精神を持った者として、「ごく普通の言語表現——読みたい人は誰でも読むことができる文字、そして音声によって知覚され、身体上の耳を傾ける人なら誰しも聞くことのできる言葉——という、いわば土製の宝物入れに納められた」言理を理解せんとする試みなのである。⁽¹³⁾

年代・場所

エウゼビオスは、アレクサンデル・セヴェルス帝の母マンマイアの要請によってアンティオキアに赴いたことを述べた後、⁽¹⁴⁾「この時からオリゲネスは聖書の注解（複数）〔の著述〕に着手した」⁽¹⁵⁾と述べている。その後、「教会の火急の用件」でギリシアに赴き、その時、カイサリアで司祭に叙階されたことを報告している。⁽¹⁶⁾以上の出来

事を記述した後、エウゼビオスは、次のように述べている。

「以上のことに次のことを言い添えねばなるまい。『ヨハネによる福音注解』の第六巻で、「オリゲネスは」まだアレクサンドリアに居た時、「同書の」初めの五巻を書きあげたと記している。この『福音』全体に関する、この作品のうち二二巻だけが我々のもとに伝えられている。『創世記注解』の第九巻によると——全部で十二巻である——第九巻に先立つ「八巻」がアレクサンドリアで口述されただけでなく、『詩編』の初めの二五編の『注解』、並びに『哀歌』に関する『注解』をも口述したことを」明らかにしている。『哀歌注解』は「五巻が我々の手もとにあるが、その中で、『復活について』(「という作品」)にも言及している。これは二巻であった。更に、アレクサンドリアから去る前に『諸原理について』を書き、『ストロマタ』と題された「作品」をも書きあげている」⁽¹⁷⁾。

以上のエウゼビオスの記述から、オリゲネスのアレクサンドリアで著述された作品群が明らかにされる。

エウゼビオスは、オリゲネスの聖書注解の第一作として『ヨハネによる福音注解』を考えているようであるが、それは、オリゲネス自身がその書の第一巻の序文で、それを「アレクサンドリアに戻ったわたしが着手する仕事の初穂」⁽¹⁸⁾と呼んでいるためであろう。しかし、オリゲネスは「初穂」と「一番成」とは同じものではないことを知らねばなりません。といいますのは、『初穂』⁽¹⁹⁾はすべてを収穫し終えた後でささげられるものですが、『一番成』は最初に収穫されたものであるからです」と述べて、「初穂」と「一番成」とを区別していることから、『ヨハネによる福音注解』が「初穂」と呼ばれているから、オリゲネスの聖書注解の第一作とは結論できない。むしろ、それ以前に「一番成」と呼ばれる作品があったとも考えられる。また、オリゲネスは、「あえて言えば、⁽²⁰⁾『聖書全体の初穂は「四つの」『福音』ですが、その「四つの」『福音』の初穂は『ヨハネによる福音』です」と考えていることから、聖書全体の初穂である『ヨハネによる福音』の注解が、彼の著作の「初穂」となると考えていた、ととれよう。同書の著述にあたってのオリゲネスの意気込みが表明されている、ととることがで

きるのではあるまいか。

従つて、オリゲネスの傾向として、幾つかの作品を並行して著述していることから、初期のアレクサンドリアでの聖書注解、即ち『詩編注解』『創世記注解』『ヨハネによる福音注解』は平行して著述されたものと考えられるが、『詩編注解』及び『創世記注解』が『ヨハネによる福音注解』に先立って着手されたものと考えるべきであらう。

さて、この『ヨハネによる福音注解』の著述年代であるが、オリゲネス自身は、その作品の中に何も記していないので、先にあげたエウゼビオスの記述が唯一の手掛りである。しかしながら、エウゼビオスの記述も、年代確定のためには曖昧な点を含んでいる⁽²⁾。

先に述べたように、オリゲネス自身、『ヨハネによる福音注解』を「アレクサンドリアに戻ったわたしが着手する仕事の初穂」と呼んでおり、エウゼビオスは、マンマイアの滞在していたアンティオキア訪問からアレクサンドリアに戻った時のことを考えているようである。ところが、このアンティオキア訪問の年代が学者によってまちまちなのである。様々な説があげられているが、大きく分けて次の三つにまとめられる。P・ケッチャウ(Koetschau)・M・アルル(Harl)・G・ゲグラー(Göglar)及びC・ブラン(Blanc)は二一八年とし、R・カデュー(Cadiou)は二二四—二二五年の間、H・クルゼル(Crouzel)・R・ウァセリヌク(Wasselynck)は二二四年とし、C・ビッグ(Bigg)・M・ベスニエ(Besnier)は二二三年、P・ノータン(Nautin)は二二二—二二三年にかけてのことであるとするのである。第三の説は別にして、第一、第二の説をとる学者たちは、それぞれ、『ヨハネによる福音注解』の着手の年を二一八年、あるいは二二四—二二五年とするのである。

エウゼビオスも指摘している通り、オリゲネスが第六巻の序文で本書の成立について述べていることから、アレクサンドリアを去り、カイサリアに移るまでに第五巻までが書きあげられていたことは確かである。一般に考えられている通り、それが二二一年であるとすれば、カデュー、R・P・C・ハンソン(Hanson)が指摘するよ

(22)うに、二一八年に着手したとして、二三一年までの十三年間に僅か五巻までしか書きあげていないことは、オリゲネスの著述の速度からみて、考えられないことである。むしろ、この点からみる限り、二二四—二二五年に着手されたと考える方が順当であらう。ただし、ノータンのあげている説も無視できないので、それを検討してみることしよう。

ノータンは、二二九—二三〇年にかけてアレクサンドリアで著述された『創世記注解』（はじめの数巻）と『諸原理について』で開示された彼の思想が物議をかもし、論争が生じたため、論争を避けたオリゲネスは、二三〇年にはバレスティナに滞在していたが、二二一年には、アンブロシオスをはじめとするオリゲネスの弟子たちの強力な要請もあって、司教デメトリオスの帰国命令に従って、アレクサンドリアに帰国し、この時『ヨハネによる福音注解』に着手し、二三一—二三二年にかけてのアンティオキア訪問の間に第五巻が著述され、帰国後第六巻の著述にかかったものと推定するのである。(23)確かに、この説は、オリゲネスが『ヨハネによる福音注解』第五巻及び第六巻の序文で述べていることに符合する。実に、オリゲネスは次のように述べている。

「あなた（アンブロシオス）は、そばにいる時、わたしに対する神の労務管理者としての任務を引き受けるだけに満足せず、遠く離れていても、「わたしの」多くの「時間」をあなた並びにあなたに提供するはずの「著作」に専念するよう要求されますので……」。(24)

「アレクサンドリアに発生した暴風雨が妨害すると思われましたが、イエスが風と海の波を叱って下さいましたので、「神から」与えられた事柄を、第五巻まで口述することができました。第六巻に進んで間もなく、エジプトの地から連れ出されました。その地からご自分の民を導き出された神がわたしを救い出してくださったからです。その後、敵は、非常に冷酷に、まさしく『福音』に反する、新しい「幾つもの」書き物を通して、わたしに戦いを挑んで、エジプトの悪の風を悉く、わたしに反対して立ちあがらせましたので、「わたしの」悟性が「静穏な」風を取り戻しておらず、この不穏な時には、聖書〔の注解〕の続きを手がけるよりも、戦い

にしつかりと立ち向かい、「心の」主導能力を「しつかりと」保持するよう、言理^{ロギク}は勧めてくださいました。それは邪悪な理屈がわたしの魂に暴風雨を引き入れるための力をつけないためです。また他方では、いつもの速記者がいなかったことも、口述を続けることを妨げました。……ある程度の心の静穏を享受することができましたので、この『ヨハネによる福音注解』という建物が完成されるために、わたしの魂の奥深い聖所におられる師である『かみ』に、その声を聞かせてくださるよう祈りつつ、「この『注解』の」続きを口述するのを「これ以上」延ばしてはならないと決意しました。……

燃えるような思いで、この第六巻の二回目の導入部を手がけていることを知ってください。といいますのも、どのような理由⁽²⁵⁾からか、わたしにはわかりませんが、アレクサンドリアで、既に口述した部分を持ってこられなかったからです」。

しかしながら、このノータンの仮説には、幾つかの点で反論がなされている。今、ここで問題となるのは、二一—二三二年にかけてのアンティオキア行である。また、アレクサンドリアから去るに至る経過も、確かにノータンの説は心理的に納得のいくものではあるが、まだ仮説ととるべきであろう。従って、このノータンの推定は、まだまだ、歴史的なデータによる裏付けが必要であると言わねばならない。

このように、本書の著述開始の年代に関しては、それを確定することはできないが、第五巻まではカイサリアに去る以前に書きあげられ、アレクサンドリアで第六巻に着手されていたが、現存する第六巻はカイサリアで新たに著述されたことは、先に引用したオリゲネス自身の記述から明らかである。

ところで、エウゼビオスは、マクシミヌス帝の時の迫害について、オリゲネスは『ヨハネによる福音注解』の第二巻で言及していると指摘している。⁽²⁶⁾従って、ここでエウゼビオスの言う第二巻が二三八年以後著述されたものであることがわかる。しかも、エウゼビオスは、『ヨハネによる福音注解』は二二巻だけ、彼の手もとにあることを述べている。現在、我々が手にしているのは第三二巻までの九巻で、最終巻は第三二巻になっている。

従つて、既にエウゼビオスの時代に、十巻が失われ二二巻に減つてゐることになる。プロイシェン (Preuschen)、アル等多くの学者は、エウゼビオスのいう第二二巻は、現在の第三二巻のことであると考えている。そして第三二巻の30がそれであると考えている。彼らの説に従うと、第三二巻は二三八年以後の著述ということになる。しかしながら、第三二巻の30は漠然としたもので、それが確かにマキシミヌス帝下の迫害に言及するものとは決定し難い。むしろ、今は現存していない第二二巻で、オリゲネスはそれに言及しているものと考えべきであろう。⁽²⁷⁾

ヒエロニムス及びルフィヌスがオリゲネスの『ヨハネによる福音注解』は三二巻と記していることから、また断片として残存しているものもヨハネ13・33以後に関するものはごく僅かである⁽²⁸⁾ことから、第三二巻で未完のまま終つたものと考えられる。いずれにせよ、第一巻から第三二巻まで、十四年もしくは二十年以上の歳月が費やされているのである。

動機

現存する本書の諸巻の序文で、繰り返し、アンブロシオスへの呼び掛けがなされていることから、本書がアンブロシオスの要請により、アンブロシオスに宛てて著述されたものであることは明らかである。オリゲネスの生涯にわたる弟子であり、友人であり、後援者でもあった、このアンブロシオスについてエウゼビオスは次のように記している。

「この頃(即ち、オリゲネスが、ヘラクラスに初心者を担当させ、自分は上級者を担当するように、そのデウスカレイオンを改革し、また聖書の本文批判の研究に専念するようになった時のこと)引用者注)、ヴァレンティノスの異端の見解を有していたアンブロシオスも、オリゲネスによって提示された真理によってその誤

りを認め、その悟性が光に照らされたかの如く、教会の「保持する」正統な教えに帰依したのである⁽²⁹⁾。

「この頃から、オリゲネスは聖書の『注解』に着手した。『それは』アンブロシオスが、数限りない言葉で励まし、煽り立てただけでなく、必要なものをあり余る程に供与することで彼を駆り立てたことによるものである。実に、口述している「オリゲネス」のそばには、時間毎に交替することになっている七人以上の速記者があり、更に「それを」筆写する者ら、美しい文字で清書する娘らが少なからずいたのである。アンブロシオスは、これらの人々に必要なものを惜しみなく供与したのである。まさしく、「アンブロシオスは」神の言葉の研究と「それへの」熱い思いに「根ざす」言語に絶する熱意を抱いており、それによって、特に「オリゲネス」を「聖書の」諸『注解』の著述へと駆り立てたのである⁽³¹⁾。

ここからも明らかなように、オリゲネスの著作の多くは、このアンブロシオスの懇願と強要によって著されたのである。まさに、「歴史と教会は、彼に対して、ちっほけな燈明ではなく、大きな燈明をとめて謝意を表さねばならない」⁽³²⁾。オリゲネスの著作の中でも珠玉の小品とも言うべき『祈りについて』は、タティアナとこのアンブロシオスの要請によって著されたものであり、マキシミヌス帝の治下に生じた迫害によって捕えられ投獄されたプロテクトスと、このアンブロシオスを激励するために著されたのが『殉教の勧め』であった。また、晩年の大作『ケルソスへの反論』も、このアンブロシオスの要請によって、ケルソスの反キリスト教論『真理の言葉』を論駁するために著されたのである。そして、初期に、アレクサンドリアで著された聖書注解である『詩編（一二五）注解』も、本書と同様に、アンブロシオスの要請によって著されたものである。

このアンブロシオスの要請がどれほど強力で執拗なものであったかは、「あなたは、そばにいる時、わたしに對する神の勞務管理者としての任務を引き受けるだけに満足せず、遠く離れていても、『わたしの』多くの『時間』をあなた並びにあなたに提供するはずの『著作』に専念するよう要求されますので」⁽³³⁾云々という言葉からも充分にうかがい知ることができる。『フィロカリア』に収録された、この『ヨハネによる福音注解』の第五巻の